

# 3

## ヘルシンキ編

### ヘルシンキの小学生の1日

7:00~  
7:30ごろ

8:15~  
9:00ごろ

#### 登校

#### 起床



交通手段として徒歩、自転車、あるいは保護者の自家用車を利用。

- ・登校時刻は、始業時刻に応じて異なる。
- ・低学年は始業時刻が早めで、給食と終業時刻も繰り上がる。

9:15~  
11:00

#### 授業

#### 授業（1、または2時限）



国語・文学、4年生では履修しない歴史などでは、授業中に個人で課題に取り組むプロジェクト型の授業が多い。

- ・1クラスは20名前後だが、クラスはさらに分けられて10名前後で授業を受ける場合が多い。
- ・クラスの友だちと担任の先生は2～8年間の持ち上がり制で、その間一緒に過ごす。
- ・教師は児童と「目線を一緒に」して自身も学ぶことをスタンスにするように養成される。

11:00~  
11:45

#### 給食時間



給食はバイキング形式で10時すぎから、低学年から順に取っていく。4年生は11時ごろ。

- ・給食のメニューはヘルシンキ市内で統一。
- ・ベジタリアンメニューも用意されている。
- ・給食はすべて無償。

11:45~  
14:15  
または  
15:00まで

授業

授業（3、または4時限）



手工芸（家庭科・技術）では低学年から比較的高度なものに挑戦する。



15:00~

帰宅  
放課後



- ・放課後は、30~60分程度宿題をする。
- ・日本の「学習塾」に相当するようなものはなく、家庭での学習は学校の宿題が中心。
- ・宿題以外では、友だちと遊んだり、自分の好きなことをしたり、習い事に通う。
- ・習い事では、スポーツ系（水泳、アイスホッケーなど）や音楽系（ピアノなど）が人気だが、月謝を払ってするようなものは少ない。
- ・共働きの多いフィンランドでは、保護者の帰宅時刻までに、習い事などに通わない子どもたちが安全に過ごすことができるような施策を求める声が高まっている。

18:00ごろ

保護者帰宅

21:00ごろ

夕食、家族との時間、就寝

- ・英語のテレビ番組が多いため、子どもたちは英語に接する機会が多い。

# ヘルシンキの小学校訪問から見たこと

西島 央 (東京大学助教)

「たとえば算数なら、(4～10点までの絶対評価で)7～8点なら十分だが、5～6点では、将来家賃を払うとき困るので、がんばるよう指導します」。

ヘルシンキでの学校見学に際して、評価の基準についてうかがったところ、5年生の担任の教師はこのように答えた。

国際6都市調査で、学業成績について、クラスの中での今の成績、とりたい成績、がんばればとれる成績の3つについてたずねたところ、表のように、東京では、がんばればとれる成績よりとりたい成績で「1(上のほう)」と答える小学生が多かったのに対して、ヘルシンキでは、とりたい成績よりがんばればとれる成績で「1(上のほう)」と答える小学生が多かった謎は、この瞬間に解明した。将来の社会生活に必要なものは困らない程度に、つきたい仕事に必要なものはもう少しがんばるようにと、ヘルシンキでは、学校で学ぶことのレリバンス、つまり、将来社会で生活したり仕事をしたりしていくために、今学校で学んでいることがどう関係し、どういう意味があるのかが、非常にはっきりしているのだ。

そのように理解すると、教育内容や方法、評価のしかた、学校経営のいずれもが、そのレリバンスを具現化するべく構成されていることがよくわかる。学校見学・インタビュー

を通してとくに強くそう感じた点を5点にまとめて紹介しよう。

## ①どのような授業方法をとっているか

上述のインタビューに答えてくださった教師の算数の授業では、単位の学習にあたり、児童を立たせて1分経過したと思ったら座るように指示して実験したり、実際に1キロ歩いたりして、時間や長さを体感させたうえで、ワークブックの単位の換算の問題に取り組んでいた。また、多くの教科では、自分で決めた課題にそって調べものをしてまとめる「プロジェクト」と呼ばれる形式の授業が行われていた。その一方で、算数や英語の授業では、日本と同じような一斉授業形式で、問題演習を繰り返す場面もみられた。

フィンランドの授業というと、問題解決力や思考力や表現力を伸ばす授業で注目されているが、基礎的な学力をおさなりにしているわけではなかった。課題が社会のどこにあるかを気づかせるきっかけづくりをしたり、その解決のために必要な基礎的な学力をつけさせたりもしている。問題解決力などの学力と基礎的な学力とが結びつくことではじめて、社会生活や仕事で役に立つ学力になるとらえているようだ。

表 実際の成績と成績観

	東京	ヘルシンキ
クラスの中での今の成績	9.4	8.4
とりたい成績	48.9	19.0
がんばればとれる成績	37.1	51.5

注) いずれも、7段階で「1(上のほう)」と答えた比率。

## ② どのような教材・教具を整備しているか

ヘルシンキでは、小学校から高校までは、教科書から文房具、給食に至るまで教育にかかわる費用はすべて無料である。ある学校で校内を案内してくださった教師は、教育予算が少ないので教科書は使いまわしているとおっしゃっていた。ところが、その小学校の美術室、技術室、音楽室といった特別教室は、焼窯、大型旋盤、PA装置など、日本なら専門学科を設置している高校以上でなければ備えていないであろう立派な施設・設備を整えており、その充実ぶりには正直いって相当に驚かされた。

日本では、教師の質、教育内容や方法の開発、教科書の無償配布といったソフト面の充実で、脆弱な施設・設備を補ってあまりある成果を上げてきた。しかし、教育の内容や方法は、ハードに依存するところが存外に大きい。その点で、フィンランドは、施設・設備が充実している一方で教科書は貸与による使いまわしという、日本とは正反対の状況にある。もちろん施設・設備も教科書も十分にあるのが望ましいのだが、フィンランドは、限られた予算の範囲で、知識の習得・整理を、文字を通して行うよりも、実社会にある現物を目にし、触り、使うことを通して行うようにしている。それにより、教材を通して知識を習得・整理するにとどまらず、学んだことが将来につながることを実感できるのだろう。

## ③ 学力をどう定義し、どう評価しているか

評価は、教師が一方的につけるのではなく、教師・保護者・児童で話し合ったり、児童に自己評価させたりしてつけているとのことであった。また、10点満点が何人いたかというようにお互いを意識させることもあるが、基本的には競争意識はなく、10点満点を基準に絶対的にとらえるとともに、自分の中で前回よりよくなったかどうかというように評価するという。その結果、これができると社会生活のどこにつながるか、この仕事につくには

何ができる必要があるかがはっきり伝わり、児童も上級生になると自分は何ができるかわかってきて、好きだったりできたりするものはもっとできるようにがんばるし、苦手な科目はまあこのくらいだととらえるようになるそうである。

“学力”とはいったい何か。その実態は非常に曖昧なものだろう。しかし、私たち日本人は“学力”という言葉でおそらくある一定のイメージを共有することができる。それは、他人との競争による相対的な位置として操作化されるものだ。だから、算数のこれがわかるとか理科のこれがわからないということより、複数教科の総合体としての“学力”が高ければ、将来的に他人との競争に勝ち残り、よりよいとされる仕事についたり、よりお金持ちになったりできるという理解のしかたを長い間共有してきたのではないだろうか。

一方フィンランドでは、教師も児童も、“学力”をそうは理解していなかった。つまり、今の生活で、または将来過ごしたいと思っている生活をしたりとつきたいと思っている仕事をしたりするうえで、知っておくことが望ましいとされることを学び、生活や仕事で十分に使えるだけわかっていることが“学力（が高いこと）”だと理解しているのである。だから、たとえば「よくわかる」という感覚は、問題を出されて1人で解決できることだそう。そのことは、当然ながら、複数教科の総合体としての“学力”というとらえ方や、他人との競争による相対的な位置としての“学力”というとらえ方をしないことにつながる。

## ④ サポート授業のねらいは何か

ヘルシンキでは、だいたい20名前後で1クラスが構成されているそうだが、どの授業をみても、それほど人数はいなかった。そのわけは、どの授業でも進度の遅い児童や特別の事情がある児童が、別の教室でサポート授業を受けているからだった。具体的には、語学や宗教などの授業であれば、母語や信仰する宗教によって選択する授業が違うという、

社会構造上のサポートがある。算数などでは、いわゆる習熟度別学級のようなかたちで、進度の遅い児童向けのサポートがある。さらには、自閉症などの障がいのある児童のためのサポートもある。なお、サポート授業を受けるかどうかについては、教師が一方的に決めるのではなく、専門家（教師カウンセラー）・保護者・児童の話し合いで決まるそうである。

ヘルシンキ大学・教育評価センターでのインタビューによれば、「あらゆるもの」がサポートの対象になるといい、小学校、中学校ごとに、どのようなサポートをするか決まりがあるそうだ。このサポートは、世界一綿密で、研究が進んで、いろいろなものにサポートがつくようになり、現在では25%の子どもたちが対象となっているという。

このように、いわゆる習熟度別学級のようなサポートだけでなく、子どもが将来社会で生活していくうえで困らないようにするという発想でさまざまなサポートが用意されている。サポート授業は、単に子ども一人ひとりの学力を上げることが目的ではなく、学校での学習の結果として平準化した社会をつくりあげることが目的だと考えられる。

#### ⑤ どのような教師－児童関係を結んでいるのか

教師へのインタビューで、教師－児童関係についてうかがったところ、昔の「教壇から立って教える」から「横からみていて導く」へ変わってきたという。その考え方を具現化したのが、1クラスの人数と持ち上がりのしくみではないだろうか。つまり、④で書いたように、1クラスの人数は20人前後である。また、低学年はその専門の教師が担任をもつ場合もあるが、基本的には、1年生から6年生まで、九年制の学校であれば9年生まで、クラスがえもなく、1人の教師が担任として持ち上がるという。

子どもたちが自ら課題を見つけて調べ、それを解決していく「プロジェクト」型の授業を成立させるためには、少ない児童数でない

と教師の目が十分には行き届かない。日本では、1クラスの人数がある程度いて競争したほうが“学力”が上がると思える風潮もあったが、“学力”をそのようにとらえていないフィンランドでは、一人ひとりの子どもに横から教師の目が行き届く人数は20名前後と考えているようだ。

また、持ち上がりのしくみについては、日本では、教師は1つの学校にあまり長くどどまらなくなり、小学校で低学年から高学年まで持ち上がることはあまりない。一方フィンランドでは、教師が1つの学校に長くどどまり、低学年から卒業するまで責任をもつ。教師は、単に学習指導をするだけでなく、保護者と一緒に長い時間をかけて子どもを社会の一員に育て上げていく役割を担っていると考えられているようだ。

以上、学校見学・インタビューを通して感じた、ヘルシンキの学校のレリバンスを具現化した点を紹介してきた。このような取り組みの結果の1つとして、OECDによるPISAで、フィンランドは学力世界一といわれているわけだが、では日本でも学力向上のために、フィンランドと同じようにすればよいのだろうか。同じようにすれば、フィンランドのようにPISAで学力世界一になれるのだろうか。

私はそうではないと考える。何より、PISAで学力世界一といっても、フィンランドの教育にまったく問題がないわけではないと思う。

第一に、ヘルシンキ大学・教育評価センターでのインタビューによれば、PISAで学力世界一なのは、さまざまなサポートによって学力の平準化が図られて平均点が上がっているからであって、トップ層では世界にはもったいい国があり、それが課題だという。

フィンランドではいわゆるエリート教育は行っていないそうだが、一方でさまざまなサポートが充実している。学力に関して、サポートの効果は、底上げによって平均点が上がることもさることながら、個々のクラスの偏差も小さくなることから効率よく授業が進め

られ、進度が速いこともあげられよう。実際、見学した5年生の算数の授業では、日本の現行の学習指導要領なら中学2年生相当の図形の問題を扱っていた。結果として一致しているかもしれないが、サポート授業による「標準化して底上げ」「進度の速さ」と学力世界一とは別のことだと考えるべきだろう。

第二に、学校で学ぶことのレリバンスを明確にすることは大切だが、社会生活や仕事などの実用面でのレリバンスの強調は必ずしもいいことばかりではないだろう。学校で学んだことをきっかけとする教養が余暇や発展を生み出す側面もあるだろうから、実用面の過度の強調は、予測可能な範囲での社会づくりにとどまる危険性をはらんでいると考えられる。

このような問題点をふまえてなお、日本がフィンランドの教育から学ぶべきは、学力世界一の授業内容や方法ではなく、将来の個人やフィンランド社会のあり方、方向性として、これでよい社会になるという理想や思想に基づいた教育計画と、ぶれない実行力のほうだろう。インタビューをしたどの教師からも、そのような理想、思想、実行力、そしてそれを支える、保護者からの信頼という自信を感じられた。

日本では昨今、学力試験をめぐる学校または地域単位で上位になるために何が起きて

いるだろうか。それによって、今の学校、今の教師、今の児童に対する相対的に高い評価や、保護者や教育委員会からの一時的な信頼は得られるかもしれないが、そのことに子どもの将来や、将来の社会に対してどんなレリバンスがあるというのだろうか。

大切なのは、今PISAで学力世界一をとらせることではなく、子どものため、10年後30年後の日本社会のために、どのようなおとなになってほしいから、どのような社会を築いてほしいから、学校教育をどう位置づけるかというレリバンスをまず考え、どのような教育をすればそれが実現できるかを検討することだ。

最近、ある小学校教師からこんな話を聞いた。なかなか逆上がりのできなかった児童が、教師の手助けや友だちの励ましによってやっと逆上がりができるようになったとき、「ああよかった、逆上がりができるようになって。もうこれで逆上がりをしなくてすむ」と言ったというのだ。もしフィンランドの教育内容や方法をまねて、PISAで学力世界一になったとしても、その学力が、子どもの将来や10年後30年後の日本社会のどこにもつながらないものだとしたら、そのような学力とそれをつけさせるための教育には、何のレリバンスもないだろう。